

<b>Title</b>	テキストを語る：『グローバル化の光と影：日本の経済と働き方はどう変わったのか』
<b>Author</b>	高橋, 信弘
<b>Citation</b>	大阪市立大学大学教育. 17 卷 2 号, p.69-70.
<b>Issue Date</b>	2020-04-30
<b>ISSN</b>	1349-2152
<b>Type</b>	Article
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学教育研究センター
<b>Description</b>	テキスト:高橋信弘(編)『グローバル化の光と影：日本の経済と働き方はどう変わったのか』晃洋書房、2018年：科目名:日本の企業：担当教員:高橋信弘(経営学研究科)：特記事項:大阪市立大学教育後援会顕彰令和元年度「優秀テキスト賞」受賞
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20200622-003

Placed on: Osaka City University

## ＝ テキストを語る Textbook Review ＝

テキスト：高橋信弘（編）『グローバル化の光と影  
－日本の経済と働き方はどう変わったのか－』晃洋書房、2018年

科目名：日本の企業

担当教員：高橋信弘（経営学研究科）

特記事項：大阪市立大学教育後援会顕彰令和元年度  
「優秀テキスト賞」受賞

### 【経済のグローバル化とは】

私たちの身の回りには、輸入品や、輸入品をもとに作られたものが多数ある。アップルのiPhoneや、パソコンの多くは、中国からの輸入品である。スーパーマーケットでは、輸入した農産物が多数販売されている。私たちが食べているパンやパスタも、ほとんどが、輸入した小麦から作られている。さらに、電気は、海外から輸入した原油や天然ガスなどを燃やして作られている。このように、私たちの生活は、輸入品なしには成り立たない。

また、2018年10月末現在の外国人労働者数は146万463人であり、日本の全労働者数の2%に達している。彼らは、それぞれの企業において貴重な労働力となっており、もしも彼らが存在しなかったとすればそうした企業は存続自体が難しくなる場合もあるほか、日本経済にも大きな悪影響を与えることは間違いない。さらに、外国人社員が日本の会社で働くと、日本人には出せないアイデアを出したり、熱心な働きぶりが日本人社員への刺激になったりするなど、好ましい効果を多数もたらすことがある。

しかし一方で、経済のグローバル化は、経済活動において、厳しい競争圧力をもたらす。例えば、日本は農産物の輸入が拡大しており、中国などで作られた安価な農産物が大量に販売されるようになった。その結果、日本の農家の収入が低下し、若者が農家の仕事を継がない。2017年における農業就業者の平均年齢は66.7歳となり、高齢化が進んでいる。また、食品の輸入増加に伴い、食品への残留農薬などによる健康被害も、ときおり発生するようになってきている。

このように、経済のグローバル化は、私たちの生活や仕事に恩恵をもたらすが、同時に、悪影響を与える。よって、経済のグローバル化は、必ずしも歓迎すべきものではない。とはいえ、技術の発展は経済のグローバル化を進展させる。それゆえ、時間の経過とともにグローバル化が進んでいく傾向にある。したがって、私たちは、グローバル化を好むと好まざるとにかかわらず、グローバル化に適応しなければならないのである。

### 【経済のグローバル化をどう活用するか】

私たちは、グローバル化に対しどう向き合い、その利点をどう活用し、その問題点を克服していくべきなのか。それを考えることを通じて、読者の皆さんが自分の生き方や働き方を見つける手助けになるのが、本書の目的である。

そこで本書は、経済のグローバル化が日本や各国にもたらした正と負の両方の影響を、様々なトピックスを通じて描き出す。これにより、グローバル化によってその国の経済や人々の働き方がどう変化したのかを理解することができる。また、単にグローバル化の影響を考察するだけでなく、過去の問題には本来どう対応すればよかったのか、現在の問題には今後どう対応すればよいのか、という観点から論じる。そこから、日本が今後どうあるべきかについて教訓を得る。

さらに本書は、グローバル化を、変革のための機会とみなしている。海外の資源を利用すれば、新しい製品やサービスの開発をするなど、国内だけでは不可能であった新しい展開が可能となる。例えば、秋田県の伝統的工芸品である川連漆器は、美しい工芸品であるが、近年その売り上げが低下していた。そこで、イタリア人デザイナーと組むことで、新たな製品を開発した。つまり、外国の人々と組むことで、魅力を作り上げた。このように、自らがなんらかの価値を持っているとき、海外の力を借りることで、その価値を生かす方法を創造できるのである。

したがって、グローバル化とは、外国のものをとり入れることや外国へ出ていくことだけではない。グローバル化とは、国内と海外の資源を結合させることである。個人、企業、あるいは地域が、自らの強みを

認識し、それを生かすために外国の資源を活用することが、私たちの目指すべきグローバル化のあり方である。

## 【本書の構成】

本書の構成は以下の通りである。前半では、日本の各産業のグローバル化の動きを、後半では世界各国のグローバル化の動きを論じている。

- 第1章 グローバル化と働き方のゆくえ
- 第2章 サービスの海外アウトソーシング
- 第3章 バブル経済の発生とアメリカの圧力
- 第4章 日本農業へのグローバル化の影響
- 第5章 介護に従事する外国人
- 第6章 外国人社員が活躍するための経営改革
- 第7章 中堅・中小製造企業における設計業務の  
オフショアリング
- 第8章 アジア通貨危機
- 第9章 韓国の外国人労働者受け入れ政策
- 第10章 欧州の移民政策に見るパラドクス
- 第11章 EUの東方拡大と農業・食品産業
- 第12章 世界貿易機関

## 【本書の特徴】

本書の特徴は、第一に、多様なトピックスを取り上げるとともに、具体的な事例を挙げて説明している点である。第2章では、日本から中国へのソフトウェアのオフショア開発をとりあげ、日本企業が、中国企業をパートナーとして扱い技術移転をしたら、しばらくするとその中国企業が自分たちのライバルになっていた話を描いている。第4章では、日本の農業の衰退原因が、日本の工業の発展であることを論じている。第5章では、日本の老人介護施設において、インドネシアやフィリピンなどから介護士を受け入れた結果、サービスが向上し、老人たちに喜ばれるようになったことを説明している。第7章では、トンネルを製造する日本の中堅・中小企業が、日本では優秀なIT人材を採用できないので、ベトナムに子会社を設立して優秀な大卒者を採用して設計業務を任せられた結果、現在では日本国内の仕事をするのにベトナム子会社の人材に大

きく依存する状況となっており、つまり海外に子会社を作ったことで中堅・中小企業が存続できている事例を論じる。

本書の特徴の第二は、先にも述べたように、単にグローバル化の影響を考察するだけでなく、過去の問題については本来どうすればよかったのか、また、現在の問題については今後どうしていけばよいのか、という観点から論じていることである。また外国の事例を取り上げた際も、日本への示唆を述べている。よって読者が、経済、経営、働き方について、今後どうすべきかを考えるヒントを与えるものになっている。第6章では、ホワイトカラー労働者として外国人を雇う際のメリットとデメリット、成功例と失敗例を説明し、デメリットを最小化しメリットを生かす方法を論じている。第8章では、1997年のアジア通貨危機を取り上げ、東南アジアの日系子会社にとって経営上の教訓を挙げている。第9・10章では、韓国と欧州の外国人労働者導入の経験を説明し、それをもとに、日本の制度がどうあるべきかについて考察する。